

創立70周年記念シンポジウム

「女子大学で学ぶとは」の掲載にあたって

安 東 由 則（武庫川女子大学教育研究所・研究員）

2009年度は、武庫川学院創立70周年にあたり、その記念事業の一環として「女子大学で学ぶとは」と題するシンポジウムが開催された。

高等教育機関には、これからの男女共同参画社会の進展、さらにはグローバル化とローカル化（地域との連携）、つまり「グローバル化」への対応が、強く求められている。こうした課題に対して、武庫川女子大学はどのように対応していけばよいのか。特に女子の総合教育を目指す武庫川学院として、本学の特色を掘り下げて認識しつつ、どのような方向性でさらなる発展を目指していくのか。この70周年シンポジウムを、これまでの歩みを振り返るとともに、その方向性を検討する機会と位置づけた。

グローバル社会、男女共同参画社会といった動向の中で、今後の女子高等教育のあり方について示唆を得るため、津田塾大学の高橋裕子教授に「女子大学だからできること：女性を伸ばす〈学び〉の環境」と題する基調講演をいただいた。日米の女子高等教育史を専門とされ、海外における女子教育の現状にも造詣が深く、津田塾大学の発展のために東奔西走されている高橋教授からは、自らの体験も交えて、女子教育をさらなる深化のための環境条件について語っていただいた。その中で、「ロール・モデル role model」「エンパワーメント empowerment（励ましと期待）」「同世代・異世代間ネットワーク（繋がり・交流・支え合い）」「メンター mentor（助言者）」などの重要性と可能性を指摘された。さらに講演の最後に紹介された詩人アドリエヌ・リッチによる女子大学の定義は、女子大学、ひいては女子教育に携わる者が女子学生に魂を吹き込む場であり、それが女子教育の基本的方向性を示唆するものであったと考える。

基調講演の後のパネルディスカッションでは、武庫川女子大学の卒業生の中から、様々な学問領域・年代の5名に集まっていたいただき、本学で学んだ自らの経験を語っていただいた。このディスカッションは、本学がこれまで行ってきた教育を振り返り、その特長と意義を把握するとともに、卒業生それぞれの経験から今後の本学の教育への提言を得ようとして行ったものである。卒業生ならではの観点から、学生時代の経験や今の社会人経験につながる学びを、率直に語っていただいた。

今回のシンポジウムを通して、武庫川女子大学における教育の歩みを振り返り、高橋教授による基調講演から今後の女子教育の方向性や課題について検討する中で、女性の貴重な視点や体験が語られ、様々な意見を聞くことができた。そうした講演や体験を記録として残し、本学のさらなる飛躍に役立てるため、武庫川女子大学教育研究所『研究レポート』に掲載することとした。

『研究レポート』への掲載・編集にあたっては、次のような手続きをとった。

基調講演については、高橋裕子教授が自らの講演原稿に加筆修正をされ、さらに、講演で話されたグレース・ホッパー会議（Grace Hopper Celebration of Women in Computing Conference）の雰囲気や少しだけでも伝わればということで、2009年の会議に参加された際の様子を、手元にある記録をまとめ直し、「付属資料」として付け加えていただいた。津田塾大学研究支援担当学長特別補佐という要職にあって、とてもお忙しい中、この原稿のために時間をさかれたことに対して、改めて感謝の意を表したい。

卒業生のパネルディスカッションについては、ディスカッションでの発言を書き起こした原稿に、本学教育研究所長の友田泰正と研究員の安東由則が修正を施し、原稿を整えた上でそれをパネリストに送付し、さらなる加筆・修正と確認をとった。原稿の最終確認は、友田と安東の責任において行った。

シンポジウムへの参加ばかりか、シンポジウム後のこのような作業に対しても、貴重な時間を割いてご協力をいただいた高橋裕子教授、本学卒業生の本仲純子氏、木村泰子氏、稲村和子氏、佐守香里氏、伊覇ゆかり氏、さらには二人の学生に心よりお礼を申し上げる次第である。

このシンポジウムの成果をどう活かしていくかは、本学の教職員をはじめ、在学生、卒業生が、この報告への理解をどれだけ深めることができるかにかかっている。多くの方に、活用をお願いしたい。